

42035

教科書文庫

4
815
41-1931
2000081688

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

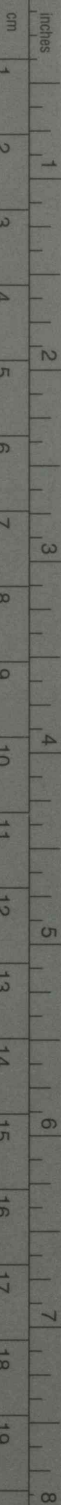


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
815
41-1931
2000081688

新制中學校文典

文典傳七吉澤義則著




資料室

教科書文庫
4
815
41-1931
2000081688

昭和六年五月一日
中學校國語漢文科用

文部省檢定濟



新制
中學校
文典

修文館發行



広島大学
教
81688
書

広島大学図書
2000081688



4a
815
昭6

例言

一本書は新教授要目に準據して中學校第一學年に於ける國文法教科書に充てんがために編纂せるものなり。

一本書は煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へて、口語・文語の異同を知らしめ、用言の活用に練熟せしむることに力を用ひたり。

一例題併に練習問題は成るべく小學校國定教科書中よりこれを探り、以て小學校との聯絡をはかり、かねて生徒の興味を喚起することに力めたり。

昭和六年二月

著者識す

新制中學文典目次

單語篇 (上)

第一章 單語・文	一
第二章 名詞	二
第三章 數詞	四
第四章 代名詞	六
第五章 動詞	九
第六章 形容詞	二
第七章 副詞	三
第八章 接續詞	五

目次

一

第九章 感動詞……………七

第十章 助動詞……………六

第十一章 助詞……………三

單語篇(下)

第一章 文語動詞の活用……………一四

一 正格活用……………一五

二 四段活用……………一五

三 上二段活用……………一六

四 上一段活用……………一六

五 下二段活用……………一六

六 下一段活用……………一七

七 變格活用……………一七

八 カ行變格活用……………一七

- 二 サ行變格活用……………一七
- 三 ナ行變格活用……………一七
- 四 ラ行變格活用……………一七
- 三 動詞活用の識別法……………一七

第二章 文語動詞の活用形……………一四

第三章 口語動詞の活用……………一四

第四章 形容詞の活用……………一五

第五章 音 便……………一六

第六章 文語助動詞の種類及活用……………一六

- 六 受身の助動詞……………一六
- 二 可能の助動詞……………一六
- 三 使役の助動詞……………一六
- 四 崇敬の助動詞……………一六

五	時の助動詞	七〇
六	推量の助動詞	七三
七	打消の助動詞	七四
八	指定の助動詞	七五
九	咏嘆の助動詞	七六
一〇	比況の助動詞	七七
二	希望の助動詞	七八
第七章 口語助動詞の種類及活用		
一	受身の助動詞	八〇
二	可能の助動詞	八〇
三	使役の助動詞	八一
四	崇敬の助動詞	八二
五	時の助動詞	八三
六	推量の助動詞	八三

七	打消の助動詞	八三
八	指定の助動詞	八四
九	比況の助動詞	八四
一〇	希望の助動詞	八五

第八章 文語助動詞と文語助動詞との接續

(附) 助動詞相互の接續 八六

第九章 口語助動詞と口語助動詞との接續 八七

第十章 助詞の用法 八七

一	ぞなむこそ	八九
二	やか	一〇〇
三	ばともども	一〇四
四	と	一〇八
五	だにすらさへ	一〇八
六	なな	一〇九

七	ばやなむ	110
八	にへ	110
九	がにを	111
一〇	てで	111
第十一章	接頭語・接尾語	112
第十二章	品詞の轉成	117
第十三章	紛れ易い品詞	133
附録	文法上許容ニ關スル事項	133

第一表 文語動詞活用表

口語動詞活用表

第二表 文語形容詞活用表

口語形容詞活用表

目

第三表	文語助動詞活用表
第四表	口語助動詞活用表
第五表	動詞助動詞接續法
第六表	接續助詞と動詞形容詞との接續法

目次終

新制中學文典

文學博士 吉澤義則 著

單語篇(上)

第一章 單語・文

- 一 花 咲く。
- 二 犬が走る。

右の例で、傍線の施してある一つ一つの語は、皆それと、或意味を表してゐる。かやうに或意味を表す一つ一つの語を單語といふ。しかして右の例のやうに、いくつかの單語が集まつて纏

單語

第一章 單語・文

①單語 或意味を表す一つの語。
 ②文 いくつかの單語が集つて一つのまとまつた
 ③品詞 單語をその意味機能形態の上
 から分類すること。
 ④名詞 名詞とは、名詞とは、名詞とは、

まつた思想を表してゐるものを文といふ。單語は、單語の意義を、單語をその意味機能形態の上から、之を左の十種に分ける。語しかしてその各を品詞といふ。

一 感動詞 助動詞 助詞
 二 名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞

第二章 名詞

- 一 東京は日本の首府なり。
 - 二 山には將軍を祭れる神社あり。
 - 三 儉約は美德である。(口)
 - 四 野邊の若草に春の日は照つてゐる。(口)
- 右の例で、傍線の施してある語は、いづれも事物の名をあらはし

てゐる。かゝる語を名詞といふ。

練習

- 一 次の文中から名詞を抜出せ。
 - (イ) 春は若草山の芝綠にもえたち、三月堂二月堂霞につままれてさながら夢の如し。
 - (ロ) 調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、のどかに聞えてくる。
 - (ハ) 一切經は佛敎に關する書籍を集めた叢書である。
 - (ニ) 黄金の鎌のやうな弦月が高く鋭く光を放つてゐる。
 - (ホ) 日本海の海戦で東郷大將の名が世界に轟いた。
- 二 名詞の定義をあげよ。

第三章 數 詞

數詞

練習二

一 我が校は去る四月十日に開校第二十周年の記念式を舉行せり。

二 一寸の蟲にも五分の魂。

三 鉛筆一ダースの價は五拾錢です。(ロ)

四 第一號から第百號まで合格です。(ロ)

右の例で、一寸五分一ダース五拾錢は事物の數量をあらはし、四月十日、第二十周年、第一號、第百號は事物の順序をあらはしてゐる。かやうに事物の數量又は順序を表す語を數詞といふ。

練習

一 次の文中から數詞を拔出せ。

- (イ) 五丈三尺の大佛一千二百年の面影を残せり。
- (ロ) 我が國は三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつた。
- (ハ) ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行く。
- (ニ) 十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。
- (ホ) 五月の初は立夏にてもはや夏の季節なり。蛙の聲もやうやく聞ゆ。五月の二日又は三日を八十八夜といふ。立春より數へて八十八日目に當るの意なり。
- (ヘ) 二十五の五分の二は十である。

二 數詞を説明せよ。

第四章代名詞

代名詞
人代名詞
指示代名詞

一 予は昨日かれを學校に訪ひぬ。
 二 (一)こはわれの知るところにあらず。
 三 汝は誰ぞそを何處にか負ひて行く。
 四 私はこれでもどれでも結構です。(口)
 五 (一)あのかたはどちらに行きましたか。(口)

右の例で、傍線の施してある語は、皆名詞の代りに用ひられてゐる。かゝる語を代名詞といふ。

又、右の例の中で、予かれわれ汝誰私あのかたは人の名の代りに用ひられてゐるもので、これを人代名詞といひ、こそ何處これどれ、どちらは事物場所方向を示してゐるもので、これを指示代名

詞といふ。

人代名詞

自稱(第一人稱)	(文)	われ	予	僕	私	拙者	わらは(女)
(口)		わたし		僕	わたくし		
對稱(第二人稱)	(文)	なれ	汝	君	貴君	御許(女)	
(口)		あなた		君			
他稱(第三人稱)	(文)	かれ			あれ		
(口)		あれ			あのおかた		
不定稱	(文)	たれ	なにがし				
(口)		だれ	どなた		どのおかた		

指示代名詞

種類	近		中		遠		不定	
	稱	稱	稱	稱	稱	稱	稱	稱
事物	こ (文)	こ (口)	そ (文)	そ (口)	あ (文)	あ (口)	いづれ (文)	どれ (口)
場所	こゝ	こゝ	そこ	そこ	あそこ あしこ かしこ	あそこ あすこ	いづこ いづく	どこ
方向	こち こなた	こつち こちら	そち そなた	そつち そちら	あち あなた かなた	あつち あちら	いづち いづかた	どつち どちら

(注意) こそあかには助詞のを添へて次の語につゞける。

練習三

練習

- 一 次の文中から代名詞を拔出し、その種類を答へよ。
- (イ) 農夫はあの山のこなたを通つて、あの川のあちらに行つた。
 - (ロ) あれは僕の作つた曲だ。聴き給へ。なか／＼うまいではないか。
 - (ハ) 君はそれとこれとどつちがすきか。どれでも君の好きな方を上げよう。
 - (ニ) おまへが今學問をやめるのは、私が今この機を切つてしまふのと同じだ。
 - (ホ) 蜻蛉釣今日はどこまで行つたやら。
- 二 代名詞の定義をのべよ。

第五章 動詞

- 一 蝶は舞ひ、鳥は歌ふ。
- 二 庭に梅の木あり。

三 朝早く起きる。(口)

四 こゝに鳩が居る。(口)

右の例で、舞ひ、歌ふ、起きるは事物の動作を、あり、居るは存在を表してゐる。かやうに事物の動作存在を表す語を動詞といふ。

動詞

練習四

練習

一 次の文中から動詞を抜出せ。

(イ) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。

(ロ) 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を作る。

(ハ) 秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日にはゆる様殊に見所あり。

(ニ) 我々は何時かは摸倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、世界文明の上

に大いに貢獻したいものだ。

(ホ) さやく／＼揺れる葉蔭では露の散るのがうれしいか、ころ／＼と蟲が

啼く。

二 動詞を説明せよ。

第六章 形容詞

一 松青く、砂白し。

二 終夜烈しき風吹く。

三 良い薬は苦い。(口)

四 夏は暑く、冬は寒い。(口)

右の例で、傍線の施してある語は、事物の性質若くは状態をあらはしてゐる。かやうに事物の性質若くは状態をあらはす語を形容詞といふ。

形容詞

練習五

練習

一 次の文中から形容詞を拔出せ。

- (イ) 義は泰山より重く、命は鴻毛よりも輕し。
- (ロ) 果物ほど味の高く、清きものはあらじ。
- (ハ) 低き家、狭き町、淋しき松、曠丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるに似たり。
- (ニ) 三度たく飯さへこはしやはらかし心のまゝにならぬ世の中。
- (ホ) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移りかはる。
- (ヘ) 夜の銀座の明るい賑しい通りを歩いてゐて、一寸細い暗い露路に入ると、足許で蟲の音がしてゐる、趣が更に深い。

二 形容詞の定義をのべよ。

第七章 副 詞

福詞

一 潮次第に満ち、水さかさまに流る。

無詞

岸の柳の葉は枯れて、ほろ／＼とこぼれる。(口)

二 この花頗る美し。

この川の流は非常にもものすごい。(口)

右の例で、(一)の次第には動詞満ち、さかさまには動詞流る、ほろほろとは動詞こぼれるの意義を限定し、(二)の頗るは形容詞美し、非常には形容詞ものすごいの意義を限定してゐる。かやうに動詞や形容詞の意義を限定する語を副詞といふ。

三 彼はいと速に走る。

もう少し静に讀みなさい。

右の例で、いと、は副詞速にの、もう少しは副詞静にの意義を限定してゐる。かやうに副詞は又他の副詞に添うてその意義を限

定することがある。

故に副詞は動詞・形容詞又は他の副詞に添うてその意義を限定する語である。

練習六

練習

一 左の文中の副詞を指摘し、且つその副詞がいつれの語の意味を限定してゐるかを説明せよ。

- (イ) 雨はらくと降りそぐ。
- (ロ) いやく降りしきる雨に、水はますく増加せり。
- (ハ) 春もやゝ景色とゝのふ月と梅。
- (ニ) 彼は最もまじめに仕事を勵む。
- (ホ) 世の出来事を速に知らんとするは人情の常なり。
- (ヘ) さえたはさみの音がちよきんくと聞えて来る。

(ト) ベートーベンはピアノの前に腰を掛けて直にひき始めた。その最初の

一音が既にきやうだいの耳には不思議にひびいた。

(チ) 今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はるくと見渡さる。

(リ) 白い雲がときくぼつちり浮んでは、又一たまりもなく吹流される。

(ヌ) 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよ
いよ深きを覺ゆ。

二 副詞を説明せよ。

第八章 接續詞

- 一 國語・英語及び數學の三科を學ぶ。
- 二 文を學び且つ武を習ふ。
- 三 春は來りぬ。されど鶯は未だ鳴かず。

接續詞

右の例で、及び、且つ、されどは上下の語句、文章を接續するため
用ひられてゐる。かゝる語を接續詞といふ。

練習七

練習

一 次の文中から接續詞を抜出せ。

- (イ) 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限りにあらず。
- (ロ) 霞か雲かはた雪か。
- (ハ) 飲食を節せよ。然らざれば健康に害あり。
- (ニ) 檜は光澤と香氣とを有し、且つねばり強くして割れ、そる等の憂極めて少
し。
- (ホ) 今日は風は吹くだらう。しかし雨は降るまい。
- (ヘ) 今日は雨が降つた。だから人出が少かつた。
- (ト) 明朝或は明晩はお尋ねいたさうと思つてゐます。もつとも雨天でした

ら失禮いたすかも知れません。

(チ) 拙宅一同無事に暮し居り候間御放念下されたく候。

第九章 感 動 詞

一 あゝ、哀しいかな。

二 いざや、歌はん諸共に。

三 さて、残念なことをしました。(ロ)

四 おや、大變ですな。(ロ)

右の例で、傍線を施した語は、いづれも感動した時に發する語で
ある。かゝる語を感動詞といふ。

感動詞

練習八

練習

一 次の文中から感動詞を摘出せよ。

- (イ) 松島やあゝ松島や松島や。
- (ロ) あはれ人の世のはかなさよ。
- (ハ) すは敵よせ來れり。
- (ニ) 憎さも憎しいで懲らしてくれむ。
- (ホ) にいさんまあ何といふよい曲なんぞせう。
- (ヘ) あら風が吹いて來た。
- (ト) おやく、まあ可愛らしう。
- (チ) あゝ口惜しい。

第十章 助動詞

- 一 明日は雨降らむ。
- 二 よく勉強又よく遊ぶべし。

助動詞

- 三 生徒、先生に褒めらる。
 - 四 僕は昨日朝早く旅行に出かけて往つた。
- 右の例で、むべし、らる、及びたは何れも動詞に添うて其の意義を助ける。かゝる語を助動詞といふ。

- 一 大阪は我が國第一の大都會なり。
- 二 級中第一の運動家は彼なり。
- 三 五と五との積は二十五なり。
- 四 波の荒きなり。

右の如く助動詞は名詞・代名詞・數詞・形容詞に添ふものもある。
一 彼は已に東京に行きしなるべし。
右の如く助動詞は又他の助動詞に添ふこともある。

練習九

練習

一 次の文中から助動詞を摘出せよ。

- (イ) 十五夜に影を見せざりし月は今宵てり出でぬ。
- (ロ) 山門高き松風に昔の音やこもるらむ。
- (ハ) 我等は諸外國の國旗に對しても常に敬意を表せざるべからず。
- (ニ) 夜の更けぬ間にこの書を読み終へむ。
- (ホ) 知らざるを知らずとする、これ知るなり。
- (ヘ) 人に車を押させる。
- (ト) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。
- (チ) 母校の運動會に誘はれた。
- 二 次の文を口語文になほせ。
- (イ) 賞品を授けられたり。
- (ロ) 文字を習はしむ。

- (ハ) 見られずといへども罪は罪なり。
- (ニ) 軍人は國家の干城なり。

第十一章 助詞

- 一 兄は畫を描く。
- 二 鳥が鳴く。
- 三 犬すら恩を知る。
- 四 人にして鳥にだに如かず。
- 五 浪荒くとも漕ぎ出でむ。
- 六 東京から歸る。
- 七 鉛筆で書く。

大物遠征

右の例のはをがすらをにしてにだにともからでは種々の語に

助詞
テニヲハ

練習一〇

ついで、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはして
ある。かゝる語を助詞といふ。助詞は又テニヲハともいふ。

練習

一 次の文中の助詞を指摘せよ。

- (イ) 言ふまじと思へど今日のあつさかな。
- (ロ) これぞわが身の幸なる。
- (ハ) 學も徳も高し。
- (ニ) 雨降り風さへ吹く。
- (ホ) 花ありやなしや。
- (ヘ) 粥ばかりすゝる。
- (ト) 千丈の堤も蟻の穴から崩れる。
- (チ) 暑くつてもしばらく辛抱しろ。

十品詞

體言

用言

練習一一

以上説き來つた所によつて、單語に十種の別、即ち十品詞のある
ことが明かである。その中、名詞、代名詞、數詞を體言といひ、動詞、
形容詞を用言といふ。

練習

一 左の文章を品詞に分類せよ。

- (イ) 國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。國旗は國家
を代表する標識にして、其の徽章色彩には深き意義あり。
- (ロ) 人の一生は重荷を負ひて、遠きに行くが如し。
- (ハ) 鳴く蟲の音を踏み分け行けば、蛙とびきりくすどび、稀には蟹がさく
と隠れ行く。

(一) 菊の香や奈良には古き佛たち。

(本) 短い夏の夜も明けて、白い陽の光が川面を照す頃、昨夜螢を追廻した川岸に立つて見ると、ゆふべの螢はどこへ行つたのか、影も見えない。

二 例をあげて十品詞を説明せよ。

單語篇(下)

文語動詞の活用

第一章 文語動詞の活用

よ(讀)

め	め	む	む	み	ま
		人		つ	ずば
		ど		く	
		ば			
		も			

し(死)

ね	ぬ	ぬ	ぬ	に	な
	れ	る		易	ずば
		時		し	
		ど			
		ば			
		も			

語尾 語根 活用

正格活用 四段活用

動詞は右の如く變化しない部分と、變化する部分とを有する。その變化しない部分を語根といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。動詞は必ず五十音圖の一行内で活用するけれども、その形式は一樣ではない。これを正格活用(五種)と變格活用(四種)とに分ける。左にその各について説明する。

一 正格活用

一 四段活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて變化するものを四段活用といふ。この活用に屬する動詞は、左の六行に存在して、動詞の中でその數が最も多い。

動詞	書く	押す	立つ	習ふ	飲む	釣る
語根	書 ^カ	押 ^オ	立 ^タ	習 ^ナ	飲 ^ク	釣 ^ツ
ア段	か	さ	た	は	ま	ら
イ段	き	し	ち	ひ	み	り
ウ段	く	す	つ	ふ	む	る
エ段	け	せ	て	へ	め	れ
オ段	(コ)	(ソ)	(ト)	(ホ)	(モ)	(ロ)
行	(カ行)	(サ行)	(タ行)	(ハ行)	(マ行)	(ラ行)

上二段活用

二 上二段活用

動詞の語尾が五十音圖のイウの二段に互つて變化し、且つウ列

に属する動詞は左の六行に存在してゐる。この活用に属する動詞は左の六行に存在してゐる。

文語

動詞	盡く	落つ	生ふ	恨む	老ゆ	懲る
語根	盡 ^ツ	落 ^オ	生 ^ナ	恨 ^ウ	老 ^オ	懲 ^ロ
ア段	(カ)	(タ)	(ハ)	(マ)	(ヤ)	(ラ)
イ段	き	ち	ひ	み	い	り
ウ段	くくく	つつつ	ふふふ	むむむ	ゆるゆる	るるる
エ段	(ケ)	(テ)	(ニ)	(メ)	(エ)	(レ)
オ段	(コ)	(ト)	(ホ)	(モ)	(ヨ)	(ロ)
行	(カ行)	(タ行)	(ハ行)	(マ行)	(ヤ行)	(ラ行)

上一段活用

三 上一段活用

動詞の語尾が五十音圖のイ段にのみ活用し、且つこれに^レれるの添うて活用するものを上一段活用といふ。この活用に屬する動詞は左の六行に存在してゐる。

動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
射る	(射 ^イ)	(ア)	い い い れる	(ウ)	(エ)	(オ)	(ア行)
著る	(著 ^キ)	(カ)	き き き れる	(ク)	(ケ)	(コ)	(カ行)
似る	(似 ^ニ)	(ナ)	に に に れる	(ヌ)	(ネ)	(ノ)	(ナ行)
干る	(干 ^ヒ)	(ハ)	ひ ひ ひ れる	(フ)	(ヘ)	(ホ)	(ハ行)
見る	(見 ^ミ)	(マ)	み み み れる	(ム)	(メ)	(モ)	(マ行)

下二段活用

四 下二段活用

動詞の語尾が五十音圖のウエの二段に互つて變化し、且つウ列に^レれるの添うて活用するものを下二段活用といふ。この活用に屬する動詞は五十音圖中の各行に互つて存在し、その數の多いことは四段活用の次に位してゐる。

居る	(居 ^ウ)	(ツ)	ゐ ゐ ゐ れる	(ウ)	(エ)	(ヲ)	(ウ行)
----	-------------------	-----	-------------------	-----	-----	-----	------

動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
得	(得 ^ウ)	(ア)	(イ)	う う う れる	え	(オ)	(ア行)
受く	受 ^ウ	(カ)	(キ)	く く く れる	け	(コ)	(カ行)

植 う	隠 る	燃 ゆ	求 む	加 ふ	兼 ぬ	建 つ	任 す
植 ^ウ	隠 ^カ	燃 ^モ	求 ^ム	加 ^フ	兼 ^カ	建 ^タ	任 ^ス
(ウ)	(カ)	(ヤ)	(マ)	(ハ)	(ナ)	(タ)	(サ)
(キ)	(リ)	(イ)	(ミ)	(ヒ)	(ニ)	(チ)	(シ)
ううう れる	るるる れる	ゆゆゆ れる	むむむ れる	ふふふ れる	ぬぬぬ れる	つつつ れる	すすす れる
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ
(ヲ)	(ロ)	(ヨ)	(モ)	(ホ)	(ノ)	(ト)	(ソ)
(ワ行)	(ラ行)	(ヤ行)	(マ行)	(ハ行)	(ナ行)	(タ行)	(サ行)

下一段活用

五 下一段活用

動詞の語尾が五十音圖のエ段にのみ活用し、且つこれに^レの添うて活用するものを下一段活用といふ。この活用に屬する動詞は、カ行のみに存在し、而も「蹴る」の一語あるのみである。

蹴 る	動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
(蹴 ^ケ)						けけけ れる	(コ)	(カ行)

變格活用

カ行變格活用

二 變格活用

一 カ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイウオの三段に互つて活用し、且つウ列に^レの添うて活用するものをカ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「來」の一語あるのみである。

サ行變格活用

二 サ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のイ・ウ・エの三段に互つて活用し、且つウ列に^レの添うて活用するものをサ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は爲^スの一語あるのみである。

動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
來	(來 ^ク)	(カ)	き	くくく れる	(ケ)	こ	(カ行)

動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
爲	(爲 ^ス)	(サ)	し	すすす れる	せ	(ソ)	(サ行)

但し、すは他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。

罪^ズす 旅^スす もの^スす 勉強^スす 辱^スくす

審^ニす 講^ズず 論^ズず 等。

ナ行變格活用

三 ナ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、且つウ列に^レの添うて活用するものをナ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞には死^ムぬ「往^シぬ」の二語あるのみである。

動詞	語根	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段	行
往 ^シ 死 ^ム ぬぬ	往 ^シ 死 ^ム	な	に	ぬぬぬ れる	ね	(ノ)	(ナ行)

ラ行變格活用

四 ラ行變格活用

動詞の語尾が五十音圖のアイウエの四段に互つて活用し、イ段で言ひ切るものをラ行變格活用といふ。この活用に屬する動詞は「有^リ」「居^リ」「侍^リ」の三語あるだけである。

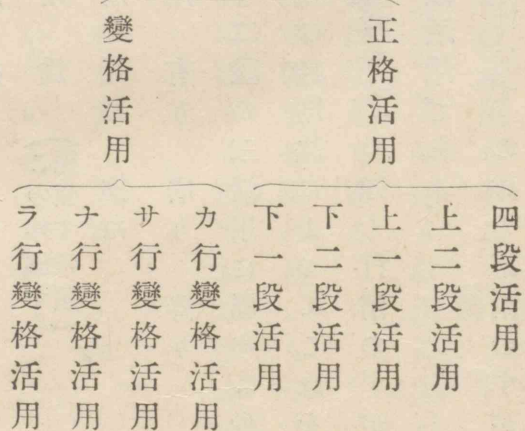
侍居有 りりり	動詞
侍居有 ^ア	語根
ら	ア段
り	イ段
る	ウ段
れ	エ段
(ロ)	オ段
(ラ行)	行

猶高かり美しかりのやうに、形容詞高く美しくにこの動詞ありのつゞいて約められたものや、明瞭なり平然たり¹のやうに副詞明瞭に平然とに同じく動詞ありのつゞいて約められたものも亦便宜上ラ行變格活用と見なす。しかしこれらは一般には形容動詞の名で呼ばれてゐる。

以上述べた動詞活用の種類を表示すれば左の通りである。

形容動詞

動詞活用



動詞活用の識別法

三 動詞活用の識別法

以上述べた正格變格九種の活用中、左の六種に屬する動詞は、その數が極めて少いから、悉くこれを諸記せねばならぬ。

上一段活用

著る 煮る 似る 干る 見る
（鑑みる、試みる） 射る 鑄る 居る 率ゐる
（頼みる、）

下一段活用

蹴る

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

（この外信ず、勉強すの類）

ナ行變格活用

死ぬ

往ぬ

ラ行變格活用

有り

居り

侍り

○四段上二段下二段の三活用に屬する動詞は、その數が甚だ多

いけれども、左の識別法によつてこれを知ることが出来る。

一 「讀まず」「書かず」の如く打消のずがア段の音につゞくも

のは四段活用である。

二 「落ちず」「悔いず」の如く打消のずがイ段の音につゞくも

のは上二段活用である。

三 「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ段の音につゞくも

のは下二段活用である。

なほ動詞の語尾の假名の紛れ易いものは、ア行ハ行ヤ行ワ行であるから、大體左の如く心得ておけばよい。

ア行活用では

（得）

え

う

うる

うれ

（下二段活用）

（射）（鑄）

い

いる

いれ

（上一段活用）

ワ行活用では

植

飢

ゑ

う

うる

うれ

（下二段活用）

（居）率

ゐ

ゐる

ゐれ

（上一段活用）

ヤ行活用では

動詞の語尾の假名違

ア行

ワ行

ヤ行

老 悔 報 い ゆ る ゆ れ (上二段活用)

甘 ゆ 嘶 ゆ 癒 ゆ 覺 ゆ

聞 ゆ おもほゆ 消 ゆ 凍 ゆ 越 ゆ

榮 ゆ 牙 ゆ 聳 ゆ

絶 ゆ 費 ゆ 潰 ゆ 痿 ゆ 生 ゆ

映 ゆ 冷 ゆ 殖 ゆ 吠 ゆ まみゆ

見 ゆ 悶 ゆ 燃 ゆ 萌 ゆ

え ゆ る ゆ れ (下二段活用)

ハ 行

ダ サ 行

以上の外はすべてハ行活用であると心得ておけばよい。
ザ行ダ行の假名も紛れることがあるが、ザ行活用は左の一語のみである。

混 ぜ ず ずる ずれ (下二段活用)

この外に講ず變ず等の如くサ行變格に活用するものがある。

其の他はすべてダ行活用であると心得ておけばよい。

練習二二

練習

一 左の文中、傍線を施した動詞は、何行何活用であるかを

答へよ。

(イ) 打向ふたびに心をみがけとや鏡は神の作りそめけむ。

(ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば、困窮したる時を思ひ出すべし。

(ハ) 頭熱して眠られず、起きて庭を歩むに、樹梢を漏れ來る月の光碧にして、蟲聲雨の如く四方に聞ゆ。

(ニ) われこの夏頃より、わけて果物を食ひ、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めば、又これを食ふ。食へば即ち心涼しく氣勇む。氣勇めば則ち想湧き筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。

朱硯に葡萄のからの散亂す。

(ホ) 子のためよかれと思ふは親の情なり。

二 左の動詞の活用の種類を答へよ。

老ゆ。 居り。 死ぬ。 死す。 据う。

用ふ。 朽つ。 信ず。 聳ゆ。 怖づ。

三 左の文中の動詞の活用に誤があればなほせ。

(イ) 汝に出ずるものは汝にかへる。

(ロ) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。

(ハ) 君に事を親に仕う。

(ニ) 困難に堪えうる人は、年老ひて憂なからむ。

(ホ) 恥じてよく改め、覺へて忘れず。

四 活用上から見た動詞の種類を問ふ。

第二章 動詞の活用形

動詞はその語尾が活用して、種々の形に變ずるものであることは已にこれを説明した。而してこれ等の語形をその用法によつて、左の六つに分類することが出来る。

未然形

一 書を読ま

ずむば

(四段)

早く起き

ずむば

(上二段)

着物を着

ずむば

(上一段)

家を建て

ずむば

(下二段)

毬を蹴

ずむば

(下一段)

友來ト ずむば

(カ變)

勉強せ ずむば
(サ變)

人死な ずむば

(ナ變)

大事有ら ずむば
(ラ變)

右は多く「ば」「む」「ず」などに連つて、動作のまだ成立しない意をあらはすに用ひる形であるから、これを未然形と名づける。

二 書を讀み始む

早く起きにくし。

人死にたゆ。

右は多く用言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連用形と名づける。

なほ、この形は動作のつゞいて起る時に前の動作をいひさす形となる。

中止形
連用形

終止形

連體形

書を讀み、字を習ふ。

着物を着、帯を結ぶ。

又、いひするて名詞となすこともある。

文字の讀みを習ふ。

うたひ(謠)をうたふ。

その他「霞」「光」「扇」「氷」「取扱」など皆この形から名詞となつたものである。

三 書を讀む。

早く起く。

人死ぬ。

右は多く文を終止するに用ひる形であるから、これを終止形と名づける。なほこの形が動詞の本體である。

四 書を讀む人

早く起くる人

死ぬる人

右は多く名詞・數詞・代名詞即ち體言に連ねる時に用ひる形であるから、これを連體形と名づける。

五 書を讀め

どどば
ども

早く起くれ

どどば
ども

已然形

人死ぬれ

どどば
ども

右は多く「ば」「ど」「ども」などに連つて、動作の已に成立した意を表すに用ひる形であるから、これを已然形と名づける。

六 流暢に讀め

早く起きよ。

人死ね。

右は命令の意をあらはすに用ひる形であるから、これを命令形

と名づける。

以上説いたところを表示すると左の通りである。

ラ	ナ	サ	カ	下	下	上	上	四	種	活
變	變	變	變	一	二	一	二	段	類	用の
有	死	(爲)	(來)	(蹴)	建	(着)	起	讀	語	根
ら	な	せ	こ	け	て	き	き	ま	未	然
り	に	し	き	け	て	き	き	み	連	用
り	ぬ	す	く	ける	つ	きる	く	む	終	止
る	ぬ	す	く	ける	つ	きる	く	む	連	體
れ	ぬ	す	く	けれ	つ	き	くれ	め	已	然
れ	ね	せ	こ	け	て	き	き	め	命	令
		よ	よ	よ	よ	よ	よ			

練習

- 一 動詞の活用形の名稱をのべよ。
- 二 命令形によを添へるものと添へないものとをあげよ。
- 三 左の動詞を活用によつて類別し、その六つの活用形を表で示せ。

(イ)	拂ふ	(ロ)	懲る	(ハ)	閉づ	(ニ)	運動す
(ホ)	射る	(ヘ)	堪ふ	(ト)	消ゆ	(チ)	論ず
(リ)	悔ゆ	(ヌ)	植う	(ル)	往ぬ	(フ)	率ゐる

四 次の文中の動詞の活用の種類と活用形の名とを示せ。

- (イ) 大空にそびえて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。
- (ロ) そのかみ金殿玉樓相望みてうちつゞく都大路を大宮人の櫻かさし紅葉かさして往来しけん今にして思へば唯一場の夢にすぎず。

- (ハ) 常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず。
- (ニ) 花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して人の夢をぞさましける。

五 次の文中の動詞に活用形の誤つてゐるものがあれば

正せ。

- (イ) 老いて後、悔ゆこと勿れ。
- (ロ) 人はパンのみにて生くものにあらず。
- (ハ) 日のくるを待ちて櫓の岐阜提灯に火を點す。
- (ニ) 與ふは受くよりも幸なり。
- (ホ) 房總二州の山々は霞に消えて視るとも見えず。
- (ヘ) 崩る崖倒る家、逃げ惑ふ人々の泣き叫ぶ聲、友はそもいかにかせし。

動詞の活用と活用形の名

口語動詞の活用

四段活用

第三章 口語動詞の活用

一 四段活用

讀まう。 (未然形)
 讀みます。 (連用形)
 讀む。 (終止形)
 讀む時 (連體形)
 讀めば (假定形)
 讀め。 (命令形)

口	文	活用	未然	連用	終止	連體	假定(口)	命令
四段	讀	語根/語尾	ま	み	む	む	め	め
四段	讀	讀めば	死ね	居れ	居れば	居る時	居ります	居らう

上一段活用

右の表の如く口語では文語のナ變ラ變共に四段活用となる。
 ◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞ではすべて假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

二 上一段活用

著よう。 (未然形)
 著ます。 (連用形)
 著る。 (終止形)
 著る人。 (連體形)

口	文	口	文
四段	ら變	四段	な變
居		死	
ら	ら	な	な
り	り	に	に
る	り	ぬ	ぬ
る	る	ぬ	ぬ
れ	れ	ね	ね
れ	れ	ね	ね

著れば 落ちれば
 著よ。 落ちよ。
 (る)

(假定形) (命令形)

口	文	口	文	活用 語根/語尾
上二	上二	上二	上二	
落		(著)		未然
ち	ち	き	き	連用
ち	ち	き	き	終止
ち ^〇	ち ^〇	き ^〇	き ^〇	連體
ち ^〇	ち ^〇	き ^〇	き ^〇	假定(口)
ち ^〇	ち ^〇	き ^〇	き ^〇	命令

右の表の如く、文語の上一段、上二段は口語では共に上一段活用となる。

下二段活用

三 下二段活用

蹴よう。 受けよう。
 (未然形)

蹴ます。 受けます
 蹴る。 受ける。
 蹴る人 受ける人
 蹴れば 受ければ
 蹴よ。 受けよ。
 (る)

(連用形) (終止形) (連體形) (假定形) (命令形)

口	文	口	文	活用 語根/語尾
下二	下二	下二	下二	
受		(蹴)		未然
け	け	け	け	連用
け	け	け	け	終止
け ^〇	け ^〇	け ^〇	け ^〇	連體
け ^〇	け ^〇	け ^〇	け ^〇	假定(口)
け ^〇	け ^〇	け ^〇	け ^〇	命令

右の表の如く、文語の下二段、下一段は口語では共に下一段活用

となる。

四 カ行變格活用

友は來ない。
 友が來た。
 友が來る。
 友の來る時
 友が來れば
 友來い。

(未然形)
 (連用形)
 (終止形)
 (連體形)
 (假定形)
 (命令形)

口	文	活用 語根 / 語尾	未然	連用	終止	連體	已然(口) 假定(文)	命令
か變	(來)							
こ	こ							
き	き							
く る	く る							
く れ	く れ							
こ い	こ よ							

サ變

右の表の如く、口語では終止形及び命令形に文語と異なる點がある。

五 サ行變格活用

運動をせぬ。
 運動をしない。
 運動をします。
 運動をする。
 運動をする時
 運動をすれば
 運動をせよ。
 しろ。

(未然形)
 (連用形)
 (終止形)
 (連體形)
 (假定形)
 (命令形)

口	文	活用 語根/語尾
さ變 (爲)		
しせ	せ	未然
し	し	連用
する	す	終止
する	する	連體
すれ	すれ	已然(文) 假定(口)
しせ ろよ	せよ	命令

右の表の如く、口語では未然形終止形及び命令形に文語と異なる点がある。

以上の如く口語動詞の活用は四段上一段下一段力變サ變の五種となる。今左に文語口語兩活用の種類を比べよう。

文語 (九種)	口語 (五種)
四段活用	四段活用
ナ行變格活用	
ラ行變格活用	

練習一四

練習

一 次の文中の口語動詞の活用の種類と活用形とを答へよ。

- (イ) 最後に出る者が戸を締める。
- (ロ) 猿も木から落ちることがある。
- (ハ) 恥ぢることを知らない者は、自ら身を辱める者である。

- (ニ) 右を立てれば左が立たぬ、兩方立てれば身が立たぬ。
- (ホ) 湯を浴びた猫は水を恐れる。
- (ヘ) 猫が肥えれば脛節がやせる。
- (ト) 打つも撫でるも親の恩。
- (チ) 怨に報いるに徳を以てするといふこともある。

二 次の口語動詞を活用せしめて六つの語形を作れ。

吠える。

朽ちる。

閉ぢる。

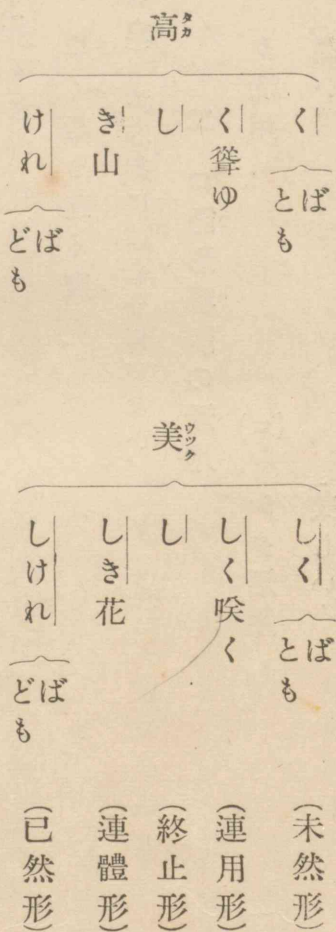
留める。

死ぬ。

第四章 形容詞の活用

文語形容詞の活用

一 文語形容詞の活用



語語
用尾根

形容詞も動詞のやうに、變化しない部分と、變化する部分とを有する。その變化しない部分を語根といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。しかしてその活用に二種類ある。即ち右の例の「高し」の如く語尾が「くしきけれ」と活用するものをク活用といひ、「美し」の如く語尾が「しくししきしけれ」と活用するものをシク活用といふ。今これを表示すると

左の通りである。

形容詞活用表

形容詞活用表

活用	語根	語尾	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	清		ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	美		シク	シク	シ	シキ	シケレ

連用形は左例の如く副詞に轉ずる語形であるから、又副詞形ともいふ。

早く起き、遅く寝ぬ。

(注意) 形容詞には命令形がない。

二 口語形容詞の活用

(イ) ク活用

「高い」

(ロ) シク活用

「美しい」

口語形容詞の活用

波が高く立つてゐる。

花が美しく咲いてゐる。

(う)

(う)

波が高い。

花が美しい。

(終止形)

高い波が立つてゐる。

美しい花が咲いてゐる。

(連體形)

波が高ければ舟は出ない。花が美しければ香も高い。

(假定形)

(注意) 文語の未然形「高くば」は口語では消滅し、已然形の「高ければ」を用ひて、假定の意味をあらはす。

活用の種類	語根	語尾	未然	連用	終止	連體	假定
ク活用	高		○	く	い	い	けれ
シク活用	美		○	しく	しい	しい	しけれ

練習一五

練習

一 左の文中から形容詞を抜出し、その活用形をいへ。

文 語

口 語

- (イ) 景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきもの世に多し。
- (ロ) 命長ければ恥多し。
- (ハ) 朝夕は凌ぎ易けれど、日中はたへがたし。
- (ニ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。
- (ホ) 雨も好し、露も好し、霞も曇も天より降るものの面白からぬは無きが中に雪は特にめでたし。
- (イ) お世辭がよければ品物がわるい。
- (ロ) 美しい林檎も酸いことがある。
- (ハ) 石が大きければ水煙も夥しい。
- (ニ) 涼しい風に送られて琴の音がゆかしう聞える。
- (ホ) 色は美しうても味は辛うてもわるい。
- (ヘ) 身分は賤しいが行狀は正しい。

動詞の音便

第五章 音 便

動詞の音便

動詞の連用形からてたりたに連なる時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、その文字をも書き改めねばならぬ。

動詞の音便に左の四種がある。

一 イ音便 *いきぎのい*に轉ずるもの。

- 説いき。 説いいて (文語) 口語
- 説いいた (口語)
- 説いいたり (口語)
- 泳いぎ。 泳いいて (文語) 口語
- 泳いいだ (口語)
- 泳いいだり (口語)

○「指して」が「指いて」となるやうに、稀に「し」が「い」に轉ずること

ウ音便

もある。

二 ウ音便 ひのうに轉ずるもの。

買ひ。 買うて (文語)(口語)
買うた (口語)
買うたり(口語)

撥音便

三 撥音便 にびみの撥音んに轉ずるもの。

死に。 死んで (文語)(口語)
死んだ (口語)
死んだり(口語)
學び。 學んで (文語)(口語)
學んだ (口語)
學んだり(口語)

飲み。 飲んで (文語)(口語)
飲んだ (口語)
飲んだり(口語)

促音便

四 促音便 ちひりの促音つに轉ずるもの。

勝ち。 勝つて (文語)(口語)
勝った (口語)
勝つたり(口語)
買ひ。 買って (文語)(口語)
買った (口語)
買つたり(口語)

釣り。 釣つて (文語)(口語)
釣った (口語)
釣つたり(口語)

形容詞の音便

形容詞の音便

イ音便

一 イ音便 さのいに轉ずるもの。

善き哉 善い哉
美しき花 美しい花

ウ音便

二 ウ音便 くのうに轉ずるもの。

暑く^〇なる　　暑う^〇なる
 深く^〇て　　深う^〇て

○又形容詞の連用形から轉じた副詞が、サ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を起すことがある。

ウ音便　　全く^〇す　　全う^〇す

練習

一 左の文中の動詞形容詞の音便を指摘してその原音を

示せ。

- (イ) 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。
- (ロ) 柿食うて洪水の詩を草しけり。
- (ハ) 振返つて見ると、神殿のあたりはずつかり深い霧に包まれて、黒々と晝で

も暗い程生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

- (ニ) 何處かで逢うたことのあるやうな人だ。
- (ホ) 學問は重荷を負うて阪を攀づるが如し。
- (ヘ) その程々に従つて祈らぬ神佛もなし。

二 左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 飛むで火に入る夏の蟲。
- (ロ) 養ふた上に敬ふことが大事だ。
- (ハ) 思ふて居るばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。
- (ニ) 今よりはよく行を慎むでかゝる。は再びすまじと誓ふたり。
- (ホ) 苦しひことも恥づかしひこともすべて堪へ忍むで、仕事にあたらうと思ふ。

- (へ) 草花など作つて餘生を楽しむで居ります。
- (ト) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。
- (チ) 林檎食ふて牡丹の前に死なん哉。
- (リ) 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- (ヌ) 轉むでも笑ふてばかり難かな。
- (ル) 翼こゝろくは仰ひで天に恥ぢされ。
- (ヲ) 任重ふして負荷に堪へず。
- (ワ) 大ひに意を強ふするに足る。

文語助動詞

第六章 文語助動詞の種類及活用

受身

- 一 受身の助動詞
- 一 犬、人に打たる。

蹴らる

二 犬、人に蹴らる。

右のるらるは或るものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを受身の助動詞といふ。受身の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ルル	ルレ	レヨ
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	ラレヨ

(下二段活用に同じ)

可能

二 可能の助動詞

- 一 一日に十里の道を行かる。
- 二 六尺の屏風も飛び越えらる。
- 三 腰間こしの秋水鐵をも斷つべし。
- 四 その勢あたるべからず。

べかり

右のる・らる・べし・べかりはその動作を成し得る意をあらはすもので、これを**可能的助動詞**といふ。
可能的助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	レ	レ	ル	ルル	ルレ	○
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラルル	ラルレ	○
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ	○
べかり	ベカラ	ベカリ	(ベカリ)	(ベカル)	(ベカレ)	○

(らる) (形容詞の活用に同じ)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

◎「べし」は又命令にも用ひられる。

明日八時出頭すべし。

三 使役の助動詞

使役

す
さす
しむ

- 一 生徒に字を書かす。
- 二 大工に家を建てさす。
- 三 下男に田を耕さしむ。

右のす・さす・しむは、或るものが他のものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを**使役の助動詞**といふ。
使役の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	セ	セ	ス	スル	スレ	セヨ
さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセヨ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメヨ

(下二段活用に同じ)

四 崇敬の助動詞

崇敬

る

- 一 父は謠曲を好まる。

らる
す
さす
しむ

- 二 校長は毎年上京せらる。
 - 三 殿下式場に臨ませらる。
 - 四 名刺を受けさせらる。
 - 五 皇太子御位に即かしめ給ふ。
- 右のるらるせさせしめは他の動作を敬ふ意をあらはすもので、これを崇敬の助動詞といふ。
- ◎崇敬のせさせしめは、通例崇敬の助動詞らる又は崇敬の動詞給ふの上に結びつけて用ひる。

五 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞

時
完了
つぬ
たり

- 一 書を読み
つぬ
たり。

り

二 書を讀めり。

右のつぬたりりは動作の完了した意をあらはすもので、これを完了の助動詞といふ。

完了の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	テ	テ	ツ	ツル	ツレ	テヨ
ぬ	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
たり	ラ	リ	リ	ル	レ	○
り	(ラ)	(リ)	リ	ル	(レ)	○

(下二段活用に同じ)

(ナ變に同じ)

(ラ變に同じ)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

(ロ) 過去の助動詞

- 一 花、散りき。

過去

二 花、散りけり。

右のきけりは動作の既にすぎ去つた意をあらはすもので、これを過去の助動詞といふ。

過去の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	○	○	キ	シ	シカ	○
けり	(ケラ)	(ケリ)	ケリ	ケル	ケレ	○

(特殊活用)
(ラ變に類す)

括弧内のものは現代文では殆ど用ひられない。

未來

(ハ) 未來の助動詞

一 明日、出發せむ。(ん)

右のむは動作の未來に起る意をあらはすもので、これを未來の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	ム	ム	メ	○

(特殊活用)

未來の助動詞は次のやうに活用する。

推量

らむ
けむ
べし
まし
む

六 推量の助動詞

- 一 靜心なく花の散るらむ。
- 二 いつの頃なりけむ、確には覺えず。
- 三 明日は雨降るべし。
- 四 夜はまだ明くまじ。
- 五 明日は雨降らむ。

右のらむ、けむ、べし、まじ、むは事物を推量する意をあらはすもので、これを推量の助動詞といふ。

推量の助動詞は次のやうに活用する。但し、むは未來の助動詞の活用に同じい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
らむ	○	○	ラム	ラム	ラメ
けむ	○	○	ケム	ケム	ケメ
べし	ベク	ベク	ベシ	ベキ	ベケレ
まじ	マジク	マジク	マジ	マジキ	マジケレ

(特殊活用)

(形容詞の活用に同じ)

打消

ず

ざり

じ

七 打消の助動詞

- 一 花咲かず。
- 二 予は出席せざりき。
- 三 君はまだ遠くは行かじ。

右のずざりじは打消の意味をあらはすもので、これを打消の助

動詞といふ。

打消の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ	○
ざり	ザラ	ザリ	ザリ	ザル	ザレ	ザレ
じ	○	○	ジ	ジ	ジ	○

(特殊活用)

(ラ變に同じ)

指定

なり

たり

八 指定の助動詞

- 一 かしこに見ゆるは我が家なり。
- 二 花の散りくるなり。
- 三 彼の性質は甚だよろしきなり。
- 四 君君たり、臣臣たり。

右のなりは事物動作有様を、たりは事物を指し定める意をあら

はすもので、これを指定の助動詞といふ。指定の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	ナレ
たり	タラ	タリ	タリ	タル	タレ	タレ

(ラ變に同じ)

咏嘆

なり

けり

九 咏嘆の助動詞

一 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。

二 見渡せば花も紅葉もなかりけり。

右のなりけりは咏嘆の意をあらはすもので、これを咏嘆の助動詞といふ。

咏嘆の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
なり	○	○	ナリ	ナル	ナレ
けり	○	○	ケリ	ケル	ケレ

比況

ごとし

一〇 比況の助動詞

一 落花雪の如し。

二 歲月流るゝ(が)如し。

右の如しは事物を比較説明する意をあらはすもので、これを比況の助動詞といふ。

比況の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ	○

(形容詞の活用に類す)

希望

たし

一 希望の助動詞

一 早く東京に行きたし。

右のたしは希望の意をあらはすもので、これを希望の助動詞といふ。

希望の助動詞は次のやうに活用する。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
たし	タク	タク	タシ	タキ	タケレ

(形容詞の活用に同じ)

練習一七

〇 練習

一 左の文中の助動詞を拔出してその種類をいへ。

(イ) 彼は篤志家に救はれ學資を給せられて、勉學することを得遂に學界の泰斗と仰がるゝに至れり。

(ロ) たゞかれて晝の蚊を吐く木魚かな。

(ハ) 勉強は幸福の母なり。

(ニ) すぎたるは猶及ばざるが如し。

(ホ) 人なつかしげに寄り来る鹿の、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眼をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。
(テアラウ)

(ヘ) 秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる。

(ト) 君はまだ遠くは行かじ、我が袖の袂の涙かわきはてねば。

(チ) かなはじとや思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。

(リ) げに持つべきものは子なりけり。

(ヌ) 人の子たらむものは重盛がその父に對するごとくありたきものなり。

(ル) これは殿下の植ゑさせ給ひし松なり。

二 次の助動詞の活用を示せ。

す。 き。 如し。 む。 らる。 さす。

口語助動詞

受身

れる
られる

一 受身の助動詞

- 一 犬にかまれる。
- 二 先生にほめられる。

助動詞 未然 連用 終止 連體 假定 命令

れる	レ	レ	レル	レル	レレ	レヨ(ロ)
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレレ	ラレヨ(ロ)

可能

れる
られる

二 可能の助動詞

- 一 この本は私にも讀まれる。
- 二 朝五時には起きられる。

◎可能の助動詞には命令形がない。

使役

せる
させる

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かせる。
- 二 大工に家を建てさせる。

助動詞 未然 連用 終止 連體 假定 命令

せる	セ	セ	セル	セル	セレ	セヨ(ロ)
させる	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセヨ(ロ)

崇敬

れる
られる
ます

四 崇敬の助動詞

- 一 父上はよく字を書かれる。
- 二 先生は毎月上京せられる。
- ◎活用は受身の助動詞に同じ。
- 三 今日は雪が降ります。

このますは動作の主に對する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示すものであります。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	マセ	マシ	マス	マスル	マズレ	マセ

五 時の助動詞

時 過去 た

(イ) 過去の助動詞

一 昨日雪が降つた。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	タラ	タリ	タ	タ	○	○

未來 う

(ロ) 未來の助動詞

一 明日は雨が降らう。

よう

二 次の日曜日に運動をしよう。

◎うよう共に活用せぬ。

推量 う

六 推量の助動詞

一 明日は多分雨が降らう。

二 明日は多分空が晴れよう。

三 やがて櫻も咲くらしい。

らしい

よう

う

◎なほこの外に推量の否定まいがある。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい	○	ラシク	ラシイ	ラシイ	○	○

四 彼は恐らく行くまい。

まい 打消

七 打消の助動詞

ぬ ない

一 書を讀まぬ。ない。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ない	○	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ	○
ぬ	○	○	ヌン	ヌン	ネ	○

指定

八 指定の助動詞

だのだ
です

一 これは梅の花だ。
二 これは梅です。

梅の花が散るのだらう。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
のだ	ノダラ	ノダツ	ノダ	○	○	○
です	デセ	デシ	デス	○	○	○

比況

九 比況の助動詞

やうだ

一 人生は夢のやうだ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
やうだ	ヤウダラ	ヤウダツ	ヤウダ	ヤウナ	○	○

希望

一〇 希望の助動詞

たい

一 早く故郷に歸りたい。

助動詞	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい	タク	タク	タイ	タイ	タケレ	○

練習一八

練習

- 一 左の文中の助動詞を指摘してその種類をいへ。
- (イ) 彼に取つていかに苦戦だつたかは、之によつて察せられる。
- (ロ) 麥の收穫に使はれる馬はその麥を食ふことは出来ぬ。

- (ハ) 長男は商業學校を卒業させて實業に就かせ、次男は陸軍士官學校に入學させて陸軍士官にした。
- (ニ) 明日雨は降るだらう、しかし風は吹かないだらう。
- (ホ) 「君は何か読んで見たいと思ふ書物はありませぬか。」かう問はれてすぐに書物の名の言へないのは恥辱だ。
- (ヘ) 今頃は定めしこちらの話をして居よう。
- (ト) 今日は晝を習つた後で、一時間の散歩をした。

第八章 動詞と助動詞との接續 (別表参照)

附 助動詞相互の接續

動詞と助動詞との接續

一 未然形に接續する助動詞

- (イ) 受身(可能 尊敬)
 - る || 四段・ナ行變格・ラ行變格
 - らる || 上一段・上二段・下一段・下二段・カ行變格・サ行變格

犬に追はる。 母に死なる。

鼠猫に捕へらる。 よく運動せらる。

- (ロ) 使役(尊敬)
 - す || 四段・ナ行變格・ラ行變格
 - さす || 上一段・上二段・下一段・下二段・カ行變格・サ行變格

書を讀ます。 君側に侍らす。

毬を受けさす。 農夫に耕作せさす。

書を讀ましむ。 よく運動せしむ。

- (ハ) 現在完了ーリ || サ行變格

運動せり。

- (ニ) 未來ーむ || 全動詞

書を讀まむ。 花を見む。

(ホ) 打消 じ ず
ざり }
|| 全動詞

書を讀み^ず。

罪を受け^じ。

讀むこと能はざ^りき。

二 連用形につゞく助動詞

(イ) 現在完了 ぬ つ
たり }
|| 全動詞

書を讀み^つ。

日暮れ^ぬ。

花を見^{たり}。

◎ぬは十行變格活用の動詞にはつゞかない。

(ロ) 過去 き
けり }
|| 全動詞

書を讀み^き。

昔人あり^{けり}。

但過去の助動詞きがカ・サ變格活用の動詞につゞく場合に限つて、左のやうなつゞき方をする。

	未	然	連	用
カ變	來 ^カ	し ^シ	か	來 ^キ
サ變	爲 ^サ	し ^シ	か	爲 ^シ
				き

(ハ) 推量 | けん || 全動詞

いつの頃より見知りけん。

(ニ) 希望―たし || 全動詞

花を見たし。 書を読みたし。

三 終止形につゞく助動詞

(イ) 推量

らむ
べし
まじ

|| 全動詞

靜心なく花の散るらむ。 午前八時出頭すべし。
罪を受くまじ。

但、右の助動詞がラ行變格活用の動詞につゞく時は、その連體形に接續する。

かく有るべし。 君側に侍るべし。

(ロ) 咏嘆―なり || 全動詞

蟲の聲すなり。 汝と今や別るなり。

四 連體形につゞく助動詞

(イ) 指定―なり || 全動詞

朝早く起くるなり。 但、なりは體言の下にもつゞく。

これは花なり。

指定のたりは用言の下にはつゞかずして、體言の下にのみつゞく。ゆるに用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞である。

(ロ) 比況―如し || 全動詞

水の流るゝ如し。

如しは助動詞がを挟んで動詞形容詞の連體形にのを挟んで
名詞につゞくことが多い。

光陰流るゝが如し。

花の美しきが如し。

光陰矢の如し。

五 已然形につゞく助動詞

(イ) 現在完了ーリ 四段活用

學校に行けり。

(附) 助動詞相互の接續

助動詞と助動詞との接續はすべて、動詞に準じてこれを知ること
が出来る。

練習一九

練習

一 左の文中から助動詞を拔出して、そのつゞき方を説明

せよ。

(イ) 物語せさせて夜を更しぬ。

(ロ) 午前十時までに店頭せしむべし。

(ハ) 櫻の花を見てかくは詠ませ給へるなりき。

(ニ) 勉強せし甲斐ありて首尾よく入學せり。

(ホ) 自らなし得ざることは之を人に強ふべからず。

(ヘ) 遙に忘れたるこし方も今更思ひだされて、消え入るばかりなり。

日夜奔走せ

サ變未然

しめ

使役未然

られ

受身連用

たり

時連用

き

時終止

未然ニ連ル助動詞

未然ニ連ル助動詞

連用ニ連ル助動詞

連用ニ連ル助動詞

- (ト) 浅草の鳩も淋しく思ふらん、日ごと見なれしわれを見ぬため。
- 二 次の文に誤あらば正し、且つその理由を説明せよ。
- (イ) 公園内に車を乗り入るゝべからず。
- (ロ) 今日先生の出せし問題は甚だ解し易かりし。
- (ハ) 吾は終夜眠らずして考へり。
- (ニ) 身體に害を及せしは過度に勉強せし故なり。
- (ホ) 再び耳を傾けれど寂として聲なかりき。
- (ヘ) 君は未だ東京を見まじ。
- (ト) その文章は余に讀まし給へ。
- (チ) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- (リ) 彼は本年も入學試験を受けり。
- (ヌ) 汝が考ふ如く容易に破られまじ。

- (ル) 心を盡せしかどもつひに甲斐なかりき。
- (ヲ) 憐むべき老年を迎ふならん。
- (ワ) 我等の渴望しし平和の曙光は漸く見えそめぬ。
- (カ) かの友は既に死にぬ。
- (ヨ) かゝる過は再びせまじ。
- (タ) 第一軍をして正面の敵を攻撃させたり。

三 動詞の未然形、連用形、終止形につゞく助動詞を列舉せよ。

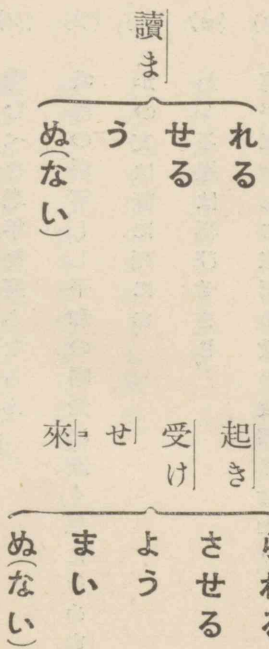
四 指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接續する時、その接續の異なつてゐる點をあげよ。

五 指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接續の上から見て、これをどんなに區別するか。

- 六 現在完了の「り」と動詞との接続法をのべよ。
- 七 過去の「き」「し」「しか」とカサ變格活用とのつゞき方をのべよ。

第九章 口語動詞と口語助動詞との接続

一 未然形につゞく助動詞



右の中、うは四段に、ようは四段以外の動詞につゞく。但、ようは

ないとはサ變の活用に對してはしにのみつゞきせにはつゞかない。

勉強しようと思ふ。(勉強せようは誤)

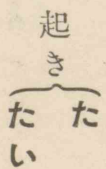
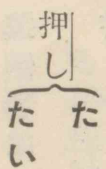
運動しない。(運動せないは誤)

まいは四段活用に對してはその終止形につゞき、サ變の活用に對してはしにのみつゞきせにはつゞかない。

書を讀むまい。四段終止

彼は感じまい。

二 連用形につゞく助動詞



三 終止形につゞく助動詞

讀むまい。

霽れるらしい。

四 連體形につづく助動詞

書く

の(だ)のである

やうだ(やうである)

練習二〇

練習

一 左の文から助動詞を拔出して、そのつゞき方を説明せよ。

(イ) もう一度ゆつくり考へて見よう。

(ロ) 兄は野球をするらしく、弟は庭球をするらしい。

(ハ) 那須の與一に扇の的を射させる。

(ニ) 私にはどうしても信ぜられない。

(ホ) たゞ一度で懲りさせたらしい。

助詞の用法

第十章 助詞の用法

助詞には種々あつて、その用法も亦複雑である。今その中で誤謬の生じ易いものについて其の用法を説明する。

一 ぞなむこそ

舜何人ぞ。

さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表してゐる。ぞが活用語につく時は、その連體形を受ける。

花ぞ落つる。

風ぞ烈しき。

夕涼みよくぞ男に生れける。

右は文の中程にぞを添へたもので、かゝる場合には下は連體形

なむ

て結ぶ定めてある。

かく緩かになむ流るる。

人と争はざるなむ賢き。

その人^{スガシ}貌よりは心なむまさりたる。

右のなむもぞと同じく強く指し示す意を有する助詞で、下は連體形で結ぶ定めてある。

花こそ咲け。

水こそ清けれ。

死なば一緒にこそともかくもならめ。

右のこそはぞなむよりも一層強く指し示す意を有する助詞で、下は已然形にて結ぶ定めてある。

二 やか

や

か

かゝることありやなしや。

かゝることあるかなきか。

夜は静かに眠らるや。

夜は静かに眠らるるか。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表したもので、その活用語につく時は、やは終止形を、かは連體形を受ける定めてあるが、今はやも連體形を受けることが多い。(許容事項参照)

花や咲きし。

誰かある。

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表したもので、下は連體形で結ぶ定めてある。

君は甲乙の中いづれを選ぶか。

五の三倍は幾何なるか。

右の如く上に疑の語のある時は、下にかを用ひる定めであるが、今はやを用ひることもある。(許容事項参照)

誰かその悲惨に涙を流さざるべき。

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

かくてやは果つべき。

いかで悲しみ嘆くべきかは。

反語

右のや、かは反語の意をあらはす。而してかゝる場合に感動の助詞はを伴ひてやはかはとして表れることが多い。

係結

已に述べたやうに文の中程にぞなんこそやかがあると、下は連體形又は已然形で結ぶ定めである。これを係結の法則といふ。但、口語にはこの法は存しない。

係語

結語

ぞなんやか……………連體形

こそ……………已然形

係結の法則は以上述べた通りであるけれども、若しその文が接續の用をなす助詞によつて下に續けられる時は、その結びは表れずして、直に下文に接續する。

花こそ咲きたれども、鳥はなかず。
タレサレド

練習二

練習

一 次の文の係結について説明せよ。

- (イ) 勉強に倦み給はん折は花なんこよなき慰めなる。
- (ロ) 重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。
- (ハ) そびらにははやこときれし將校の亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。
- (ニ) 中江藤樹こそ眞の儒者なれ。

(ホ) 長く交はりてぞ人の性質は知らるる。

二 次の文の係結に誤があれば正し、且つ其の理由を説明せよ。

(イ) 白きを見れば夜ぞ更けにけり。

(ロ) たゞ涙を催す種とぞなりき。

(ハ) 東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ工なれ。

(ニ) 「貧家に生れたるぞ幸福なり。」と古聖もいはれたる。

(ホ) 昔の旅はさこそ不自由なりけんと思はる。

三 ばともども

明日雨降らば延期せむ。

明日天氣よくば旅行せむ。

今日雨降れば行かず。

ば

とも

ど

ども

水清ければ大魚棲まず。

右の如く**ば**が未然形に結びつく時は**假定**、已然形に結びつく時は**確定**の意味をあらはす。

口語では左例の如く已然形で假定確定兩様の意をあらはす。

明日雨が降れば延ばさう。

水が清ければ魚が棲まない。

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらず。

たとひ兵寡くともよもや敗るゝことはあらず。

花咲けども鶯未だ來鳴かず。

この品好ければども買はず。

右の如くと**ども**が動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は

假定どどもが動詞形容詞の已然形に結びつく時は確定の意をあらはす。(助動詞との結びつき方は動詞形容詞に準じて之を知ることが出来る。)

現代文に於ては、誤解を生じない限りともどももの代りにもを用ひることが許されてゐる。(許容事項参照)

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

口語―てもけれどもでも

鳥の鳴かない日はあつても……

品は好いけれども……

茶は飲んでも……

と

四と

並列のと

月と花と。

宗教と道德との關係。

京都と神戸と長崎とに行く。

事物を並列するとき、右の例の如くその一々の下にとを添へる定めであるけれども、誤解を生じない時は、最終の語句の下に之を省いても妨げない。(許容事項参照)

但、左の如き場合には之を省くことは出来ない。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

北條時宗、幼名を太郎といふ。

あの川を澱川と呼ぶ。

右のとは動作の標準を示す。

月出づと見えて。

動作の標準を示すと

上文を指示する

太平洋の夜は、今明けなんとす。

右のとは上文を指示する。

右の如くとが活用する語につく時は、終止形を受くべき定めであるけれども、現代文では連體形を受けることもある。

(許容事項参照)

五 だにすらさへ

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞかなしき。

鳥にだににしからず。

草木すら情あり。

行方すらも覺えず。

雨降り風さへ吹く。

だに

すら

さへ

涙をさへ落して喜びたり。

右の内だににすらは輕きをあげて重きを言外に思はせ、さへはあ
るが上に更に添ひ加はる意の助詞である。

口語ではだにもすらもなく、さへが一般に用ひられる。

鳥にさへ及ばない。 行方さへも分らぬ。

六 なな……そ

決して怠るな。 ゆめ忘るな。 危き場所に居るな。

右の如くなを動詞の終止形に添へると、その動作をすなと禁止
する意を表す。 但、ラ變の動詞に限つて、その連體形に添はる。

かくなのたまひそ。 深くな咎めそ。

吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻かな

近く寄りて過なせそ。

な……そ

な

な：：そはなと同じく禁止の意をあらはす。而してこの場合にそは動詞の連用形を受ける。但、カサ變格の動詞に限り、その未然形を受く。

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや。

我が子、學者にならなむ。

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

注意

「鳴きもふりなむ」のなむの如く連用形につくものは現在完了

のぬの未然形に未來のむの結びついたものである。助詞のなむと混じてはならぬ。

八 へ

學校に行く。

大阪に住む。

前へ進む。

彼方へ向ふ。

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語ではへもにも同じやうに用ひられる。

學校へ行く。

東京へ行く。

九 がにを

大いに努力せしが遂に效なかりき。

日暮れたるに宿るべき家もなし。

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはる、野路

の村雨。

右のがにをは語句を接續する助詞であつて、活用する語の連體形に結びつく。

口語ではがは文語と同じであつて、にをはのにに相當する。

て て

日くれて道遠し。
 言はでやみぬ。 (ではすての變化したものである)
 右のてでは語句を接續する助詞でては連用形に、ては未然形に
 結びつく。

練習三

練習

一 左の文中の傍線を引ける助詞を説明せよ。

- (イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
- (ロ) もし不都合なる點あらば指摘せらるべし。
- (ハ) 時は金なりと古人も云へり。
- (ニ) 良からぬ小説などな読み給ひそ。
- (ホ) 我に對する爲にはあらで先生を敬する爲にてありけるよ。

- (ヘ) 月を見れども楽しからず、鳥を聞けども嬉しからず。
- (ト) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。
- (チ) わるいことは決してするな。

二 左の文に誤があれば正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず。
- (ロ) 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。
- (ハ) 成績あしとも失望するに及ばず。
- (ニ) 板垣死するとも自由は死せず。
- (ホ) もし御差支も候へば御一報下されたく候。
- (ヘ) 見事かの頭上の林檎を射落せば汝が命を助けん。
- (ト) 車へ乗りて行かむ。
- (チ) 立錐の餘地さへなし。

て接頭語が添うて出来た熟語はもとの語と品詞を同じうする。
二 接尾語

單獨では用ひられず、ある他の語の下について、其の語と熟語をなすものを接尾語といふ。

ども……私ども
ら……僕ら

がた……あなたがた
たち……友だち

ばら……奴ばら
以上複数をあらはすもの)

どの……次郎どの
さま……兄さま

君……山本君
以上敬意をあらはすもの)

さ……黒さ
み……厚み

げ……重げ
以上形容詞の語根について名詞をつくるもの)

めく……春めく
ばむ……黄ばむ

さぶ……神さぶ
がる……うれしがる

らし……男らし
けし……露けし
(以上名詞・形容詞について動詞をつくるもの)

すがら……夜すがら
けし……露けし

がてら……花見がてら
以上名詞について形容詞をつくるもの)

づつ……少しづつ
づつ……少しづつ

以上列挙した例のやうに接尾語はいづれも或る意味を添へるものである。而して接尾語が添うて出来た熟語は、接尾語の性質によつて品詞を異にするものである。

品詞の轉成

第十二章 品詞の轉成

轉成の名詞

一 轉成の名詞

轉成の代名詞

二 轉成の代名詞

- (イ) 動詞の連用形から || 光。霞。氷。霽。
- (ロ) 動詞の終止形から || 茂シゲル。薰カケル。勝マカ以上人名。かげろふ。すまふ。
- (ハ) 形容詞の語根に接尾語みさを添へる。厚み。重さ。
- (ニ) 形容詞の終止形から || あかし(燈)。すし(鮓)。からし(芥子)。
- (ホ) 形容詞の語根から || 白。黒。赤。

轉成の副詞

三 轉成の副詞

- (イ) 名詞から || 君。僕。小生。殿。臣。
終日食はず、終夜寝ねず。
- (ロ) 動詞の連用形から。
今日雨降る。

轉成の接續詞

四 轉成の接續詞

- (ハ) 形容詞の連用形から。
たとひ雨が降るとも……。
それはあまりひどいことです。
形容詞の連用形から。
水能く流る。花少しく開く。
- (イ) 名詞から
暑さ甚しく候處、御障りも無之候や。
- (ロ) 動詞から
土曜日及び日曜日は休業す。
- (ハ) 副詞から
山また山を越ゆ。

練習三

練習

一 左の文章中から接頭語と接尾語とを摘出せよ。

- (イ) さ夜ふけてほの暗き御あかしの影ものさびし。
- (ロ) 御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかより給はば末代までの御恥辱にて候。

(ハ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む。

(ニ) 秋らしくなりていと露けし。

(ホ) 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹み空の花を星といひわが世の星を花といふ。

(一) 色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

二 形容詞の轉じて副詞となれるもの五六をあげよ。

三 左の名詞の構成を説明せよ。

たうる(田植) よろこび。 樂しみ。 讀み書き。 憂。 末廣。 振舞。

第十三章 紛れ易い品詞

多くの單語の中には、語形が同じで、品詞を異にするものがあり、又同じ品詞の中でも種類を異にするものが多いから、品詞を鑑別する場合に於ては、特にこれ等の同形異義の語に注意せねばならぬ。左にその主なるものを説明しよう。

一 たり

書を読みたり (現在完了の助動詞)
君君たり臣臣たり (指定の助動詞)

山巍然たり (ラ行變格の終止形)

二 なり

建築なりぬ (動詞)

形容動詞

なり

たり

なむ

彼は學生なり (指定の助動詞)

花の美しきなり (指定の助動詞)

日暮るゝなり (指定の助動詞)

鐘の音すなり (詠嘆の助動詞)

三 なむ

散りなむ (なは現在完了の助動詞ぬの未然形むは未來

の助動詞)

咲かなむ (願望の助詞)

月なむ見ゆる (係の助詞)

ぬ

四 む

花咲きぬ (現在完了の助動詞)

花の咲かぬ枝 (打消の助動詞の連體形)

な

五 な

ゆめ忘るな (禁止の助詞)

忘れじな (感動の助詞)

花散りなば (現在完了の助動詞ぬの未然形)

しか

六 しか

昨日こそ早苗とりしか (過去の助動詞きの已然形)

君は何時歸りしか (しは過去の助動詞きの連體形かは

疑問の助詞)

練習二四

練習

左の文中傍線を施した語の文法上の差異を述べよ。

(イ) かくこそ思ひしか。いつの年うせ給ひしか。

(ロ) 死にし子顔よかりき。

露と消えにし命かな。

(ハ) 汝と今や別るなり。

汝と今別るゝなり。

その謀空しくなりぬ。

(ニ) 今日來鳴きいまだ旅なる時鳥花橋に宿はからなむ。花なむこよなき慰めなる。

見る人もなき山里の櫻花外の散りなむ後ぞ咲かまし。

(ホ) 花の色はうつりにけりな。

主なしとて春な忘れそ。

(ヘ) 死にたる人。

人の人たる道。

(ト) つきぬ怨。

食盡きぬ。

附錄 文法上許容ニ關スル事項

一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。

二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。

四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 手習サス。

周旋サス。

賣買サス。

六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

てにをは「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

九 疑ノてにをハ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一〇 てにをハ「トモ」ノ動詞・使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一一 てにをハ「ト」ノ動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞・及時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一二 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをハ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最

終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一三 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをハ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一四 てにをば「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一五 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ」ナルヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、専ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其ノ例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ、審議ノ末、許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今、文部省ニ於テハ、教科書檢定、又ハ、編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

文部省檢定濟

用科文漢語國校學中 日一月五年六和昭

昭和六年二月二十三日發行
昭和六年四月十五日訂正再版發行
昭和六年四月十八日訂正再版發行

新制中學文典

定價金四拾五錢

著者 吉澤義則
京都市左京區修學院

發行者兼印者 鈴木政雄
東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

發行者 鈴木常松
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地



發行所

東京市神田區神保町一丁目二五ノ一
振替口座(東京二六四四番)
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座(大阪四七一一番)

東京修文館
大阪修文館

文部省檢定濟

用科文漢語國校學中 日一月五年六和昭

昭和六年二月二十三日發行
昭和六年四月十五日訂正再版發行
昭和六年四月十八日訂正再版發行

新制中學文典

定價金四拾五錢

著者 吉澤義則
京都市左京區修學院

發行者兼印者 鈴木政雄
東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

發行者 鈴木常松
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地



發行所

東京市神田區神保町一丁目二五ノ一
振替口座(東京二六四四番)
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替口座(大阪四七一一番)

東京修文館
大阪修文館

修文館發行

第三學年
乙組
佐
石川縣立金

広島大学図書

2000081688



